

「特集」
ためす

形

forme



日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

特集

ためす

図画工作の活動は、子どもたちが様々なことを「ためす」機会にあふれている。

この「ためす」という行為は、どのような意味をもつのか。

子どもたちの成長に何をもちたらすのか。なぜ必要なのか――。

東京都豊島区立目白小学校での授業実践を振り返りながら

それぞれ違う立場で子どもにかかわる三名に話し合っていた

① 旧校舎の壁を使ったビー玉転がし。
ペットボトルの角度を色々と「ためす」

「失敗」を受け入れる

赤池 原先生が実践なさった授業では、子どもたちの真剣な姿が数多く見られました。普段、家庭では「汚さない」ことを優先させ、ダイナミックな造形活動はなかなか経験させられません。造形活動に没頭する我が子を見たことがない保護者は、案外多いのではないのでしょうか。

林 楽しさが伝わる写真ばかりで、子どもたちは生き生きしています。このような雰囲気での授業が行われているのはよいですね。

写真のうち、校舎の壁をビー玉転がしのコースに変身させる授業は面白い取り組みです。

原 校舎の建て替えて仮校舎に引越す直前、お世話になった旧校舎で思い出に残るような活動をさせたいと考え、建物自体を使った作品展を校長先生に提案しました。快諾いただき、四年生には、色画用紙や巻き芯、筒などの様々な身辺材を用意し、組み合わせをくふうしながら壁にビー玉コースターをつくる授業を行いました。

林 ビー玉はどのように転がっていくのか。角度を調節しながら「ためす」瞬間はワクワクするのでしょうか（写真①）。自分で決めた角度、コースにチャレンジし、うまく転がらなくても再挑戦は可能調整するうちに、自分の思いにあった転がり方を見つけて出すんですね。原先生は、子どもたちにかけてあげない時間を与えています。

原 授業では、導入をなるべくシンプルにしました。活動内容について説明した

後は、安全性に配慮する以外、子どもたち任せました。すると、つくっては試すということを繰り返しながら、続々とアイデアが生まれ、形になっていききました。コースの装飾においても、紙を切り抜いた「ありがとう」の文字を壁に貼って校舎への思いを表したり、ローラーや手で色をつけ始めたりする子どもも出てきました。子どもたちの発想はともユニークで、普段から、どんな小さな発見も見逃さず、受けとめようと心がけています。

赤池 原先生が見守ってくれているから、子どもたちは安心して試せるのでしょうね。

林 試した末に、「よかった」「だめだった」「まあまあだった」と何かしらの結果を得られます。たとえだめでも、それは貴重な体験。小さな「失敗」や「うまくいかない」「できない」を繰り返し、新たな可能性を切り拓いていきます。その積み重ねでひとつの作品が完成します（写真②）。図画工作は、「失敗」しながら活動していく教科です。

「すぐに役立つ」、 「早くできる」ではなく

赤池 「失敗」はマイナスではなく、むしろプラスに働くのですね。それがわかれば、親子ともに気が楽になります。ただ、大人社会、ビジネスの世界においては、効率とスピードが優先されます。「効率のよい子育て」などないはずですが、切り替えが難しい。「なるべく『失敗』を減らし、効率よく学ばせたい」「技術

を教えてやってほしい」と親は望んでしまいます。

「答えを教えないことのよさ」は、どのように伝えればよいのでしょうか？

林 作品を完成させるだけが、図画工作や美術の目的ではありません。つくる過程に意味があります。例えば粘土の塊を渡すと、子どもたちは両手やひじ、ひざまで使って格闘します（写真③）。

原 これは、「きつて けずって くっつけて」という三年生の授業です。まずは粘土の塊を練り、次に切り糸で切断するなど道具の使い方を実演して見せた後、子どもたちは道具の使い方を試しながら粘土と向き合いました。

赤池 題材名に名詞ではなく動詞的な表現を使うことで、子どもたちの発想も広がるのでしょうか。

林 それに、自分なりの方法で工夫できるのが粘土のよさです。ひとつの材料にじっくり向き合うことで、いろいろな出来事や様々な困難に立ち向かう姿勢が育





④ 一度削り取ったものを戻してみる。
粘土は、何度でも「ためす」ことができる材料

③ 粘土と格闘中。
全身で試しながら質感を確かめている

② みんなの作品が壁中に広がる



つのです。口頭で「やり方」を教わり、早く完成させたとしても、そうした姿勢は養われません。一見合理的でも、かえって非効率。自主性や積極性はトライ・アンド・エラーを繰り返しながら獲得していくものです。

赤池 確かに我が子を見ていても、親が促したものは一切興味を示さず、自ら選んで取り組む遊びや勉強のほうが熱中しますね。

林 粘土のもうひとつのよさは、リセットできること。うまくいかなければ、最初の状態に戻して何度でもチャレンジできます（写真④）。最終的な形は自分で決めなくてはならない。同じ「リセット」でも、ゴールが決まっているようなテレビゲームとは大きな違いがあります。

子どもの姿を評価する

赤池 粘土や絵で「うまさ」を追求するだけが教科の目的ではないのですね。しかも、「うまさ」の基準は曖昧です。つい実物に似ているか否かで判断してしまいがちです。

林 図画工作や美術は、絵をかく、作品

をつくるためだけの時間ではありません。技術を磨く修練の場とも違います。様々な造形活動を通して、子どもの育ちを促す時間です。

しかし、仰るように、「上手なかかせ方、つくり方」を学ぶのが最優先という誤解があるなら、私たち教師が「プロセス」の大切さを伝えていかななくてはなりません。

原 校内に作品を展示する際、授業中の活動写真も一緒に掲示したり、各専科教諭による「専科だより」を毎学期二回発行したりして、子どもの姿を少しでも伝えられるようにしています。最新号には、「作品を見たときの一言を大切に」と記しました。見栄えでなく、頑張ったところや思いを認めてあげれば、表現しようとする子どもの姿勢が変わると思います。

赤池 ひたむきさや笑顔があふれる写真を見れば、思わず頬が緩みホッとするでしょうね。

もうひとつ、保護者の関心は評価です。成果物の出来、不出来にとらわれるのもそのためだと思います。

林 大切なのは、作品だけで評価しないということですね。子どもが自発的にやりたいことを見つけ取り組んでいるか、自分のアイデアを楽しんでいるか、「失敗」しても次の一歩を踏み出せたかといった途中経過も大事です。

赤池 経験値や学年・年齢は関係しないのでしょうか。「答え」を早く知れたがる子どもや、入学したばかりの一年生でも大丈夫でしょうか？

原 幼少期の影響が全くないわけではありませんが、子どもは順応性が高く、発

想も柔軟です。一年生に、様々な形の紙からイメージしたことをもとに絵に表し、それらを色画用紙に貼って自分だけの世界を作り上げていく「いろいろなカタチラインド」という授業を行った際、最初は戸惑っていた子どもも次第に手を動かし始めました。

林 虹、人の顔などを描いた五枚をレイアウトし、配置を「ためす」児童の姿が見られました。まず一枚を糊づけし始め（写真⑤）、続いてほかの絵をどのように貼るかを模索していきます（写真⑥）。作品を意味づけしていくプロセスそのものです。

お手本がないとつけれないなど、「やり方を教わらないとできない」のは大人の責任。幼いころから常に指示され、従うよう習慣づけられているからです。何でも先に教える「先回り育児」は、子どもの自発性や好奇心、豊かな表現力を奪います。

「ためす」は自己を確立する手立て

赤池 最近、「失敗しないように育てられた」という大学生と出会いました。さ





⑨ ビー玉を転がす時、その視線の先に何を見ているのだろう



⑧ 自分だけの光の世界が生まれた



⑦ 光を見ながらどんなことを感じているのだろうか？



⑤⑥左 置き場所を何度も試して、自分が納得できる作品にしている

らに「自分には価値がない。友人の多くが同じ思い」と話す学生にも。実際、日本青少年研究所が平成二十二年に実施した「日米中韓の高校生の比較調査」で、日本の高校生の自己評価や自尊感情は四ヶ国中最も低い、と報告されています。

林 自分を認められない若者は増えているのかもしれない。しかし、大学で美術教育を専攻する学生たちには、「図画工作や美術は『ブチ自己実現』の時間」と伝えていきます。何度でもやり直しができ、自己を解き放つ時間を確保せよと。

その中で、子どもたちは自らの手で新たな価値を創造します。例えば粘土はただの四角い塊が「乗り物」に、工作では木っ端が「動物」に生まれ変わります。ゼロから出発し、自力で何とかする経験は、生きていくためのエンジンをつくっているようなものでしょう。

原 子どもたちは能動的な「遊び」の中で感性を働かせます。低学年はもちろん、高学年になっても、材料などに積極的にかわかっていける時間としかけを用意することで、子どもたちは一人ひとり思いをもって活動を続けることができます。その経験を積み上げていくことが大事なのだと思います。

赤池 造形遊びの時間がしっかりと確保されるようになったのは、触れる体験、感じる体験、遊びそのものの体験不足を補うためと聞きます。かつては生活の中で自然に備わっていた感覚を、入学後、授業を通して養うということですね。

林 「光のさしこむ絵」の授業でも、遊びの時間を大切にしていましたね。

原 二時間のうち前半はたっぷり光と



かわり（写真⑦）、後半、プラスチック段ボールに色セロハンやペンなどで光の面白さを生かしながら思いついたことを絵に表しました。（写真⑧）。存分に光を感じ取ることで視野が広がり、光を取り込んだ作品の表情も豊かになります。

林 理科でも光を学びますが、客観的な観察を重視するのに対し、図画工作では光のもつやさや面白さを感じるものが重要です。この授業では、光と一緒に遊んだ後、光を操りながら作品をつくらせ、最終的に光を自分のものにして楽しんでいくのです。外側にあるものを内面に取り入れていくのは、自己確立の第一歩です。同時に外部へアウトプットして自己表現するうちに、他者との違い、自身の存在を確認していきます。その繰り返しで自己はつくられていくのです。

図画工作での「ためす」行為は、この一連の流れとも結びついています。

原 独自の方法で作品をつくる過程も着地点も、自分で選び、自分で決めることが大切ですからね。

林 それは、試行錯誤しながら、人生の方向性を自身で決めるのと同じです。未曾有の少子高齢化社会に、前例は通用しません。そこで、「考える力」や「生き

る力」がますます重要視されているわけです。図画工作の時間に自分で問いを立てる、そして自分で答えを出すことの積み重ねが、これからの時代を生き抜く大きな糧となるはずです。

赤池 迷いながらも「自分らしさ」を見つめる一歩として、図画工作や美術の果たす役割は非常に大きいのですね。

林 先のビー玉転がしをつくる活動で、作品を下から見上げる子どもたち（写真⑨）は何を考えていたのでしょうか。玉が転がったら「うれしい」し、うまくいかなかったら「どうしよう」……。大げさに言えば、見上げた先に「自分の未来」を投影していたのかもしれない。こうした思考や感受を重ねていきながら、子どもたちは自分を信じる力をつけていくのだと思います。

- 赤池紀子**（あかいはのりこ）P. 4上
小学校二年生の子を持つ母。
子育て支援誌を編集するクレオ代表。
- 林耕史**（はやしこうじ）P. 4下
群馬大学教育学部教授。美術教育講座・彫刻担当。
- 原薫美子**（はらくみこ）P. 5
東京都豊島区立白小学校主任教諭。
図画工作科専科。
今回の授業の実践者。

「ためす」を实践する

「絵の具で夢もよりっ」

（小学校3年生・
A表現（2））

子どもたちが「ためす」活動に

夢中になるかどうかは、

授業の準備、展開と工夫次第。

意欲はどうすれば引き出せるのか。

「ためす」をふんだんに

採り入れた授業を实践する

目黒区立五本木小学校・鈴木陽子先生の

図画工作の時間におじゃました。

念入りな準備、丁寧な導入

一学期最後の三年生の授業。この日のテーマは「絵の具でためしながら」「あっ！いい感じ」（という感覚を大切に）自分だけのものよりの紙をどんどんつくる。筆だけでなく、ローラーや刷毛などの用具を使い、様々な大きさの紙に絵の具と水で自由に描く活動です。

導入では、以前絵の具を使って製作した作品を見ながら、色の濃淡や組み合わせ方、何を用いて描いたかを振り返りました。

「ローラーを多く使って、最後は手も使っていたね。ほかには？」という鈴木先生の問いに、「キャップでコロコロしたり、水たまりになったところを傾けたりしたよ」と答える子ども。「すごいね。そんな方法もあるんだ。滑り台みたい。ローラーを転がしたら、違う世界を見つけた感じだね」と先生は返します。絵の具や水、筆の使い方をおさらいし、最後に「絵の具でためす」という活動のポイ



ントを全員で確認しました。

テンポのよさが鈴木先生の授業の特徴ですが、入念な準備がそれを可能にしています。全体の流れから、課題や材料・用具を提示するタイミングまで、子どもの活動場面を想像しながらひとつひとつ検討を重ねるそうです。

「やりたい」気持ちを尊重する

まずは中央の作業台に積んだ正方形の紙を一枚ずつ取り、筆で水を塗る、絵の具で線をかく、点をつける。紙のおかわりは自由です。パレットで青色と黄色を混ぜて紙に塗り、その上に赤色を重ねて塗って新たな色へ。「自分の色」を探したり、にじむ様子を楽しんだりする子どももいれば、一滴ずつ小さな水滴を垂らす子どももいます。紙にたっぷり色をつけた部分を指で少しずつ広げるといふ具合に、用具が筆から指先へ、さらに掌へと広がった子どももいました。

「ためす」光景も見られました。「真似」することは、「面白そう、私も同じようにやってみよう」という意思の表れ。自分で選択・判断する行為です。色をつけた紙を二つに折り、開くとどのような模様になるかを「ためす」姿も。鈴木先生は、その子どもの頭をそっと撫でました。

「ためす」って気持ちいい！ を実感させるには

「ちょっとだけ筆を置いてもらっていい？」と鈴木先生。いつの間にか、用具をのせたお皿が各班の机の上に用意され、紙の種類も長方形など五つに増えています。用具を班ごとに置くのは、用具から得た着想「このプチプチはどう使えるか」「刷毛を使ったらどのような絵や線がかかるか」などをすぐに活かせるように。画用紙を一ヶ所の作業台にまとめるのは、紙を取りに行く時に、ほかの子どもの活動も見られるようにするためです。

授業の最初からすべての用具を渡すことも考えたそうですが、まずは絵の具と水だけでじっくり「ためす」時間をもたせたいと、途中で追加することに決めました。用具と紙をさりげなく出すことで、子どもは集中を途切れさせることなく、活動を広げていきます。

鈴木先生は「自分で自分の表し方を見つけてください」と一言添えました。「霧吹きがあったらいいな」とつぶやく子どもには、「かわりに使えるものはないかな？」と投げかけます。すると、歯ブラシにたっぷり絵の具を含ませ、上から下

におもいっきり振り下ろす方法を考え出しました。

スポイトで大きな水玉をつくった子どもは、「スポイトであんなに色がつくと思わなかった。大きな水玉は、下に色がたまって、上が透き通って見える」と得意げに話してくれましたが、きれいだと感じたその水玉を、このまま壊さないようにするにはどうしたらよいかと不安な様子です。気がついた鈴木先生はすぐそばに寄り、乾燥棚に移すことを提案しました。

メッシュを使いながら「これに絵の具をつけたらどうなるかな」と手に取る子どもに「何ができそうかな」とにっこり「しずくとしずくがくっついて色が混ざると、色が変わる」と話す子どもには「発見したんだね」とささやきかけます。

さりげないアドバイスと柔軟な対応が、子どもたちの想像力を伸ばし、もっと表現したいという意欲を掻き立てるのでしよう。





子どもたちがためした跡。「次」へとつながる作品たち

子どもとの信頼関係がカギ

子どもたちに図画工作への思いを聞いたところ、「色々な材料を使うと、自分の思ったことができる」「先生が言ったことをやってみると、普段は思いつかないアイデアがわく」「自分で考えられるから、図画工作は好き」と。

鈴木先生は、「あなたならどうする?」と「答え」ではなく「問い」を与え、次につながるヒントを提示していました。同時に、子どもたちの考えを尊重し、思いついたことを積極的に「ためす」機会をつくっています。

イメージを引き出す言葉かけも欠かさず、例えば、活動中に「どんな感じ?」と尋ねると、子どもは「海の中」と即答します。言語化により何を表したいか(表せたのか)が明確になる子どもに対しての、思いをよりよく表現するための意識的な働きかけだといえます。そうしたやり取りからも、子どもたちは「先生が自分を認めてくれる」と理解し、信頼関係



を築いていきます。

「子どもたちをいかに信じて待てるか。教師である私たちは試されているのです」と鈴木先生。「子どもたちは、塾通いや習い事も多くて日々忙しい。そんな中、図画工作は自分のやってみたいことにじっくり取り組むことができ、没頭できる時間にもなっています」とも話します。

授業の最後には、子どもたちが自分のお気に入りの一枚を教室の前に掲示しました。小さな作品ですが、それは一人ひとり自分で試しながら見つけたまさに「自分だけのまよの紙」です。この日試したこと、試しながら見つけたこと、自分で考えたことは、きっと子どもたちのこれからに生きてくるでしょう。

先生との「信頼」によって「ためす」経験を重ねることができると、図画工作、美術の時間。そこで生まれる「形」や「色」には、子どもたちの未来が映しだされているのかもしれない。



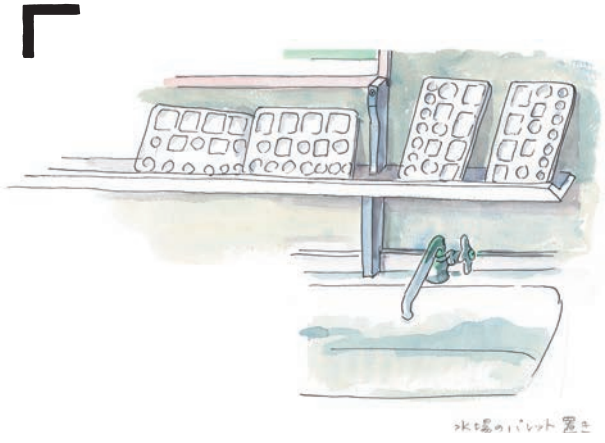
「設場の」

美術室編

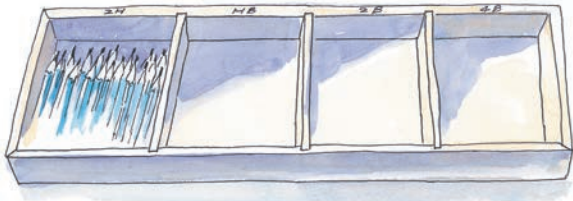
文とイラスト

山本幹雄

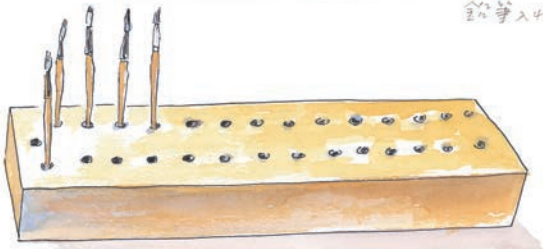
神奈川県茅ヶ崎市立松林中学校



水色のパレット置き



鉛筆入れ



筆立て



美術室をデザインしよう！

今から三十年ほど前、中学校の増設や美術室の新設が相次ぎました。私たちがまず考えたことは「子ども一人分の作業スペースから全体の教室スケールを導き出そう」ということでした。机は、四つ切り画用紙、絵の具、パレット、水入れが置ける面積として、天板を八十五cm×六十cmとし、材料は厚み三cmの檜の無垢材に決めました。当時は、この机を四十五台入れるスペースとして一・五教室分プラス廊下取り込み分を要望しました。また、準備室は〇・五教室分を基準としました。

生きている美術室

豊かな造形活動を生み出す非日常の空間が美術室です。子どもたちが、自らの課題に取り組むために次々にやってきま

す。それらに柔軟に対応できてしかも魅力的な空間が理想です。動線、視線を考へて、基本の配置を決めていきます。動きやつぶやきがおおいに参考になります。改良を重ねることで美術室は生きた空間になります。授業内容という精神的な空間と教室環境という物理的な空間がコラボして活き活きとした活動が生まれます。

美術はものを通しての教育だ

美術の授業は「段取り七割」。授業目標を達成するために、教材教具の工夫準備が肝心です。私の授業では、子どもはほとんど手ぶらでやってきます。授業時間が週一時間になってからは共同で使用する用具を充実させました。高価な絵の具も共同でなら使うことができます。画用紙も、活動ごとにもっともふさわしい紙を使いたいものです。子どもの力を侮って、ものの段取りをおろそかにする

と、気持ちを受け止めきれず「もったいない」授業になってしまいます。

準備室から教具を生み出そう

必要な教具を使いやすい形・大きさにデザインし、楽しく機能的な授業を行うためにも、準備室を単なる収納スペースにせず、必要なものを作り出す作業空間にしたいものです。

作り勝手と温かみから、木による教具作りが有効です。まずは鉛筆入れや筆立てなどの小物から。授業者の思いが形になると、授業をする楽しみが意外なほどに増します。やがて額縁なども難しくなってくるようになります。表現を支える教具から展示を本格的にする額縁まで手作りしたいものです。

授業実践

学びのフロンティア

小学校5・6年生向き

多彩な焼き物

発想を豊かにしてつくる

福岡県柳川市立藤吉小学校 中村学



ねらいと子どもの学び

焼成で表したものは、独特の美しさが生まれたり、生活の中で使えるほどの丈夫さが生まれたりするものです。

そこで、焼成粘土は焼くと硬質化し、保水性、耐熱性、保存性を持つという特徴をとらえ、○●な雰囲気にするキャンドルシェードやティーポット、小物入れなど機能を持つ、自分ならではの作品をつくる活動をおこないました。ねらいは、へらや切り糸などの用具を活用し、線、面構成による焼成粘土の成形ができる喜びを味わうこととしました。

子どもの学びで大切にしたのは、次の三つです。

一つは、子どもが自分はこの目的のためにこんな焼き物をつくりたいといった製作の原動力となる思いや願いをもつことができるようにしたこと。

二つは、子どもが構想したことを基に相互交流させ発想を豊かにしたこと。

三つは、実際に陶芸家や、焼き窯のある製作現場と出合あわせ、本物に学ぶ体験ができるようにしたこと。

導入を考える

導入では、世界の陶芸を鑑賞させたり、焼成粘土や用具に触れさせたり、自分の生活にある焼き物の場を探索させたりして、こんな目的のためにこんな焼き物をつくりたいといった思いや願いを抱かせました。そのために、導入で世界の陶芸作品を鑑賞させる時にひと工夫します。ポイントは二つです。

一つは、子どもが、焼成したものの様々な特徴をとらえ、つくる目的を選択できるように、多様な用途の作品を見せること。

二つは、自分ならではの発想で形

や色、質感を工夫するヒントになるように、いくつかの作品の一部を隠して見せ、その部分を想像する活動を位置づけることです。

導入で、教師が「焼き物とは、どんな物をイメージしますか」と問うと、子どもたちの大半は「花瓶やお皿、カップ」と答えました。

その後、プロジェクトを用いて、世界の陶芸作品を見せていきます。時折、作品の一部を隠して見せ、隠された部分を子どもたちに想像して学習プリントにかかせます。

子どもたちは画像に映し出された作品の形や色といった情報を基に、隠された部分を想像することを楽しみます。このことが自分ならではの工夫の発想に生きてきます。

授業後、子どもたちは「今まで焼き物といったら、コップかお皿だと思っていました。しかし、焼き物は陶芸家の、ずっと使える飽きのこない作品にしたい、自分の今の心に合うよ

うにしたいという思いが込められている」「焼き物って自由にいろんな形や色につくれるものなんだな」と感想をもつことができました。

この後、子どもたちは、自分の生活の中でこんな焼き物があつたらいいなと思う焼き物を探索していったのです。

発想を豊かにする構想の交流

子どもたちが自分の表現主題と最終像を持った状態の時に、表現主題とイメージスケッチや試作品について、今自分が考えていることを伝え合うようにします。

すると子どもたちは、用途は同じでも全体や部分のモチーフが異なること、モチーフと機能の組合せにユニークさや美しさがあり、魅力があることなどを見出ししていきます。

このことを通して子どもたちは、もう一度の自分のつくろうとしてい



指導計画	
時間	7時間
領域	A表現(2) B鑑賞
材料・用具	信楽粘土、へら、切り糸、30cm程度の丸棒
学習目標	焼成粘土の特徴を生かした自分ならではの焼き物をつくりだす喜びを味わう
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ●焼成粘土は、焼くと硬質化し、保水性、耐熱性、保存性を持つという特徴をとらえる ●へらや切り糸などの用具を活用し、線、面構成による焼成粘土の成形ができる
主な評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ●焼成粘土を使った造形に関心を持ち、特徴を生かして意欲的に表し、オリジナルの焼き物をつくりだそうとする(造形への関心・意欲態度) ●焼成された粘土の特徴をもとに構想できる(発想や構想の能力) ●表したい形に合うようにへら等を使いながら面や線の構成ができる(創造的な技能) ●作った人の思いや意図、形の工夫や美しさをとらえることができる(鑑賞の能力)

子どもたちは明確な構想をもっているため、面や線による構成、ひねり、くり抜きなど、自分ならではの創造的スキルを発揮して形づくっていきます。

形が完成すると後は彩色です。実際に工房に行き、素焼きされた自分の作品、たらいに入れられた数種類の釉薬、そして陶芸家の方に出合わせます。

本物に学ぶ体験

子どもたちは「自分の好きな曲がモチーフ」「生き物と容器の組合せ」といった視点から改善を図りました。オリジナルティーポットという表現主題から、自分が最も好きな曲「アゲハ蝶」を思い出として残したいという思いを加えて、蝶型のティーポットに構想を変えたのです。

子どもたちは、陶芸家の方から、釉薬は速乾性があり、その色のつけ方も作品の形態に応じてかえなければならぬことなどを、実演を通して学びます。

その後、陶芸家の方に「みんなが作った作品は、自分の手でしかつくれない。だからいいんだ」と話していただきました。

オリジナルの焼き物が学校に届き、包み紙を開いた時の子どもたちの喜びや驚きの表情が今でも目に浮かびます。

授業実践

学びのフロンティア

中学校 2・3年生向き



ずっととさわわっていたい形

鑄造技法で制作する、ペーパーウエイト・テーブルコースター

神奈川県横浜市立いずみ野中学校 金阿彌勉かなあみつとむ

なぜ金属なのか

本校では、三年間でできるだけたくさんさんの材料に触れ、それぞれの特長を生かした制作を行う授業を大切にしていきます。

また、三年間共通するテーマとして、『ずっとさわっていたい形』というタイトルをつけています。文字通り手の中で「なじむ」「しっくりくる」「なんかフィットして落ち着く」というイメージです。

その中でも金属の持つずっしりとした重量感と、人類が求め続けてきた『永遠の輝き』ともいえる美しい光沢感を追究させられることから、この題材を設定しています。

手だてと子どもの学び

①新鮮な驚き

最初は、あえて手の中ですっぽりとおさまる丸みのある石を用意します。「こんな感じで手におさまり重しになる（ペーパーウエイトの役

割を説明）ものをデザインしてみよう」とアプローチ。「何でつくるの？」「石？」「どうやってつくるの？」という質問をのらりくらりとかわし、しばらくして、全員を集め鑄込みの実演を行います。

「つくりたい形がここにありません」と発泡スチロールで作った原型を見せます。「なんで？」「軽いじゃん」という反応が出ます。「今からこれをずっしりとしたペーパーウエイトにします」といって砂型に埋め込みます。

次に、コンロと鍋を用意、点火して空炊きします。最後に地金の錫をおもむろに取り出して鍋の中へ……。次第に熔けていくと「うわっ」「すげーっ」という声が出ます。側にいる生徒に錫が熔けきった鍋をペンチで持たせます。「重っ」という反応。液体だと軽く見えますが、実際にはとても重いのです。

そしていよいよ鑄込み。銀色の液体が湯口から入っていく様子に



実演の様子

生徒の視線が集中。数分後、脱型して砂の中から宝探しのようには作品が現れてきます。机の上に軽く落とすと、ゴトツという重量感のある音に「おーっ」という声が上がります。「発泡スチロールはどこにいった？」という問いに対する「中に閉じこめられている」「蒸発した」などの反応を生かし、鑄型のしくみの解説プリントを配布します。

②造形力

鑄込みの実演をみて、生徒の制作意欲は一気に高まります。ここで使用している発泡スチロールはごく一般的なものです。球体などしっかりした発泡材は熔けきらず不適です。ということで、生徒は5cm厚の塊から塑型したり組み合わせたりしながら造形していきます。「ずっとさわっていたくなるような」「ペーパーウ



型入れ

エイトとして使いやすい」形という条件を考慮しながら、丁寧な制作を進めていきます。紙ヤスリで表面をそつとさせるように仕上げると、雪像のようにきれいな原型が出来上がります。金属磨きは大変なので、早く鑄込み作業がしたい生徒の気持ちを抑えながら、ここを丁寧に行うことが重要です。

③記憶に残る体験

原型完成後は、映像で工程を再確認させ、型入れ↓鑄込み↓脱型↓研磨へと進みます。側に私が付きますが、鑄込みも含め全て生徒自身が行います。理屈ではわかっていても、金属が熔けるのを実際に見られる希少性と緊張感のある制作の体験、そして完成後はずっと変わるのではない重量感と輝きが手元に残る……。こんな、記憶に残る体験を金属との



鑄込み

出会いで学んで貰っています。

なお、現在では鑄造実践の普及をめざし、より簡単に指導・制作が可能な題材として、シナベニヤとコルクシートで型枠を作って鑄込む「コースターづくり」を実践し、様々な検証を行っています。



脱型



指導計画	
時間	10時間
領域	A表現(2)(3)
材料・用具・場の設定	発泡材と成形加工用具、型枠・型砂・コンロ・鍋などの鑄込み用具、鋳地金、脱型用具、仕上げ研磨用具など危険なくスムーズに制作できるように、毎時工程ごとの活動人数を確認し、活動場所を指定しながら進めるなどの工夫をする
学習目標	金属の特長を知り、その特長を活かしながら手触りの心地よさと機能を両立する形を表現する
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ●金属の持つ特長や鑄造の制作工程を理解すると共に、触覚的な心地よさとペーパーウエイトとしての機能を両立する形を構想する ●計画的に制作をすすめ、光沢の度合いやバランスを考えて表現する
主な評価の観点	<p>金属の魅力を感じ取り意欲を継続させ制作に取り組もうとしている(造形への関心・意欲・態度)</p> <p>金属の特長やペーパーウエイトの用途を考慮した形を考えている(発想や構想の能力)</p> <p>用具を適切に生かし求める形を追求している(創造的な技能)</p> <p>完成作品を使いながら良さを味わっている(鑑賞の能力)</p>

先
ず
見
る

之儿目儿

第三回

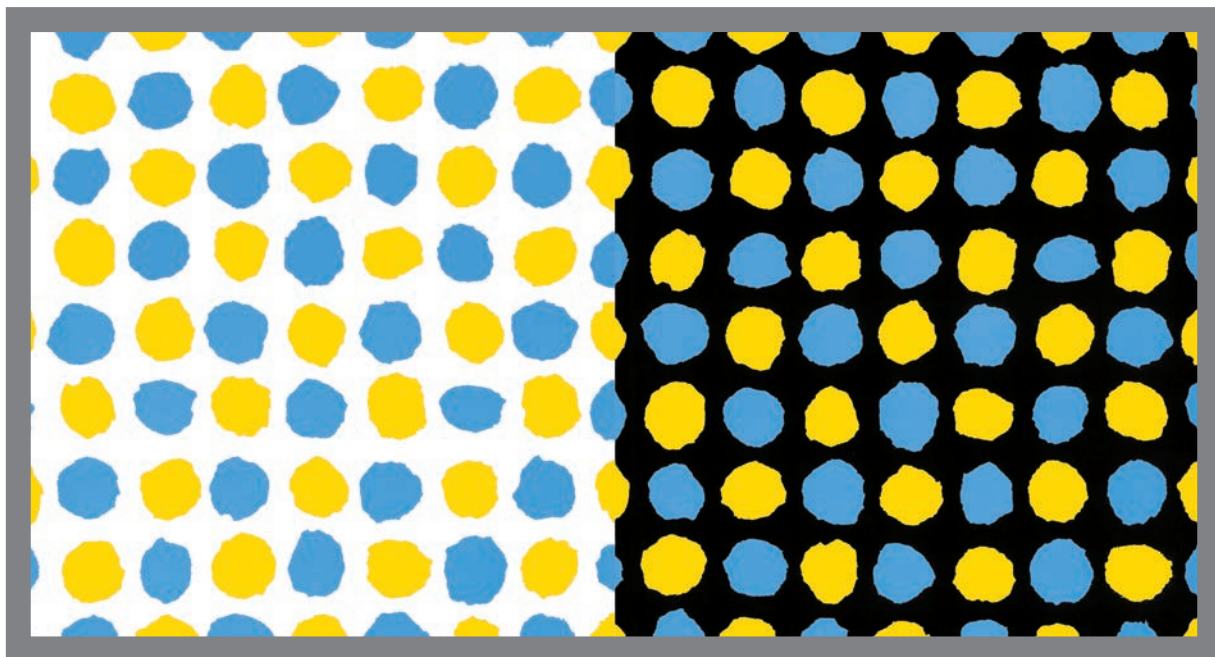
曇り空のむこうには、
青空がかくれている

膝の上ののって、お話を子どもが味わう時、内容だけではなく、話し手の声の質感や膝の弾力や体のぬくもり、声の振動なども味わっています。そこでは、子どもは、自分を包み込んでくれる者と一体化した親和性のなかで、世界に対する志向性や態度を育んでいきます。絵本は子どもと大人という二人の読者を媒介するものです。レオニの絵本は、子どもにも大人にも高い人気を博しています。子どもの興味とともに、大人の思いや願いも満たすような表現がそこにあります。

それは、子どもを「小さな大人」や「未熟者」と見立てた「教化」としての絵本ではなく、子どもが、視覚体験を通じて、自由に想像力や遊び心を働かせながら、成長を育むような絵本です。

『あおくんときいろちゃん』

「あおくんときいろちゃん」(一九五九)は、孫とのかかわりの中から生まれました。この絵本は、シンプルな色彩原理でお話が展開するという画期的な絵本です。レオニは、グラフィックデザイナーとしての表現を見事に生かし、この絵本を制作しました。そして、この絵本の驚くべきところは、たんに色彩学的方法論を取り込んだという手法上のことではなく、それが、子どもの心を紡いだり、満たしたりする表現へと結実しているというこ





とです。

個と全体の調和への希求

実は、ひとつの色彩はそれ自体として成立しません。「青」は、その背後にある他の色彩との関係の上でしか存在しないのです。レオニは、こうした色彩や形体の相対的な関係を見事に絵本表現に生かしています。

例えば、「ペツエッティーノ」(一九七五)や「スイミー」(一九六三)などでは、存在論的な「個と全体」への問いかけが、その色と形の中に織り込まれて表現されています。それは、子どもにとっての「自分」や「他者」や「社会」という成長過程の中で発する根源的な問いかけに重なり合っています。ほんとうの「私」を成立させていくには、自分を含めたひとりひとりの存在の尊さが、「みんな」との関係の上に調和をもつ時に成立するのだと、レオニは、「勇気」と「希望」をもって、読者に語りかけるのです。

「フレデリック」(一九六七)では、ちょっとした野ねずみを通して、ARTや芸術家が人間にとってかけがえのない存在だと述べ、その重要性について言及しています。

大戦中にアメリカ亡命を強いられたレオニは、世界は恐怖と絶望に満ちた側面があることを、骨身に沁みて知っています。こうした経験から発せられる「勇気」や「希望」の強さに、今なお、子どもや大人は、魅きつけられています。

辻政博 つじまさひろ

帝京大学専任講師。東京造形大学絵画科卒業。

東洋大学大学院修了(教育学修士)。

大正大学大学院比較文化博士課程単位取得満期退学。

東京都図画工作研究会前会長。絵本学会会員。著書多数。

【フレデリック】レオ・レオニ「フレデリック」1967年 Frederick©1967, renewed 1995 by Leo Lionni/Pantheon Works by Leo Lionni, On Loan By The Lionni Family

【展覧会情報】展覧会：レオ・レオニ 絵本の仕事

会期：2013年12月7日-2014年2月16日 会場：北九州市立美術館分館 主催：北九州市立美術館、朝日新聞社、九州朝日放送

会期：2014年4月26日-6月8日 会場：刈谷市美術館 主催：刈谷市美術館、朝日新聞社

1

127,336,619

文：田野隆太郎 写真：新井卓

第三回

松岡茂樹

家具職人とは、何も長髪をバンダナで束ねた仙人のような人だけを呼ぶのではない。ここに容姿や生き方、すべてに一線を画す元不良少年がいる。テレビで特集されるほど成り上がった半生。繊細な仕事からは想像できない型破りな道を、彼はいかに開拓したのか。



松岡のバイクは、10代から愛用のもの。家具同様、修理してでも使い続けたい、そう思えるものが好きだ。奥が亀井。

工房前の広場は、コンクリートと車輪が摩擦し、鋭い音が響いていた。太陽が真上から見下ろす午後、数台のスケボーが滑走し、跳ね上がる。男たちの色あせたシャツは、噴き出す汗でみるみる黒みを帯びていく。炎天下だろうが極寒だろうが、ここに訪れた誰もが見る光景だ。競技場に迷い込んだわけではない。これが彼らの休憩の過ごし方なのだ。

家具もスケボーもどっちも好きだし、今よりも上手になりたい。だから練習する。それが彼らの行動の基本だ。仕事でもなんでも、そうしたと思ったことを自分たちはやっているだけ。彼らはそういうだろう。自分のしたいことが分からない……多くの人がそう眩く今、この行動原理は特異に映ることだろう。

株式会社KOM A。東京の端、武蔵村山の工房で家具を作っている。トップは松岡茂樹。伴走するのは亀井敏裕。そして修行半ばの若者たち。彼らの家具の特徴は、無垢の木の素材をいかしたゆるやかなフォルム。機能性を追求する中で必然的に生み出された曲線、その繊細さが際立つ。しかし、わたしが見た松岡は、どこかボクサー風情でやんちゃさが漂う。スポーツ選手と職人……フィールドは違えど、腕ひとつで這い上がってきたという自信に錯覚させられるのか。作られたものと作り出した人物、そのギャップが面白い。

父親の教育が子に与えたこと

松岡は、広告代理店の社長と中学校教師の両親の間に生まれた。恵まれた環境……そうではなかった。『オレが高校に進学させて欲しいと言おうと「何をしに高校行くんだ、大工にでもなれ」そんな言葉が返ってくるような父親だった。幼い頃から、父親を納得させる理由がないと相手にもしてもらえない。欲しいものがあり、自分なりの理由を一生懸命考えるのだが、首を縦に振ってくれないのだ。「じゃあ、高校にはどうやって行かせてくれるの?」「入学金を持つてきたら三年間面倒みてやる」とことん突き放された。だから、彼は高校入学前の春休み、引越のバイトをして十八万円貯めた。

そうまでして入った高校だが、結局遊びに明け暮れた。改造したバイクで仲間と疾走する、典型的な「不良」の毎日。何とか卒業に漕ぎ着けたものの、父親に毎月十万円入れるか、出ていくかを迫られた。後者を選択したが、自分のしたいことがなかった。そんな中、部屋で寝そべっていると、昔の住人が天井に貼っていた絵の痕跡が目がいった。そういえば、オレ絵が好きだったよな。思い出した。小学生の頃、絵画展やポスターコンクールにはいつも入賞していた。一念発起し、友人が通っていた美大の予備校に潜り込む。好きだった絵は、ここでも褒められた。だが、疑念が頭をもたげる。「絵を描

いて、今後何になる?」。すべてのことを当たり前と思わない……幼い頃から教え込まれたあの教えが顔を出した。「アーティストやデザイナーだって絵を元にした職業なんだよ」。予備校講師の言葉に、絵で飯が食えることを初めて知った。

彼が頭角を現したのは、専門学校の内テリア科を卒業後、就職した木製家具製造会社だった。面接で「会社の技術は三年で会得し辞めます」とぶち上げた。最低十年と諭されたが、絶対ここで一番になってやると豪語。しかし、仕事を始めると自分の技術が通用しないことに驚く。周囲は、向いてないから辞めろと大合唱。だから意地でも、通常業務に加え自主練と椅子制作を怠らなかった。八時半始業の一時前半前には入り、十八時終業のところを二十二時近くまで居残った。

そんなある夜、作業をする彼の脇に立つ人間がいた。社長だった。「お前が入社した時は、どこの不良が入ってきたかと思ったよ。大口叩くやつはすぐ逃げるのに、お前は毎日続けている。さすがに褒めてもらえないな」。会社で初めて褒めてもらえたことが嬉しかった。「もうちょっと辛抱しろよ、そうしたらお前に何かプレゼントしてやる」。まもなく、松岡がデザインから制作まで掌握できる社内ブランドが立ち上がった。入社二年の若造が四人の親方たちと肩を並べる異例の抜擢。だから、以後も一日一脚、寝る間を惜しんで椅子を作った。専

属の営業担当がデパートに卸す椅子は、月三〇〇万を売り上げた。これで名実伴った。周囲も納得せざるを得ない。

だが当の本人には、いつもの疑問が浮かんでいた。「この上ってあるのか?」。次は路面店を作りたい。それを目標に設定し、社長に提案したが、却下された。会社がそういう環境を作らなかつたら、オレがワクワクできない。有言実行で掴んだ地位を、自ら降りた。

「もの作りはひたすらやりますよ。努力の人だし……いわば家具を作ることに関しては秀才なんですよ。でも、生きていくことに関しては天才かもしれない」。松岡の最大の理解者、亀井敏裕の評だ。

唯一無二の伴走者を見つける

二人は専門学校の同級生。彫金を専攻していた亀井は、卒業後フリーで宝飾品などを作っていた。会社を辞めた松岡は、工房をシェアしようと亀井に声をかける。プラスチック専攻の知人も呼んだ。三人の個性で科学反応を起こしたい。個人事業主の集団『デザインワークスKOM A』が走り出した。だが、膨らんだ夢は一年であっけなく破裂した。亀井が、飯が食えないのを理由に抜けたのだ。それに松岡が反発した。結果、救急車が出動する騒ぎとなる。

だが解散後も、松岡はある意図を持ち制作を続けていた。判断の甘さを反省し、再び亀井と飯を食っていくために、どうすべきかを思案。リベンジへの原動力は二点あった。夢半ばで諦めたという後悔。それと、家具を自分で作り、売るという「家具作家」としての生業に限界を感じていた点だ。彼は見かけによ

らず、自分が作ったものを上手くアピールできないシャイな性格だった。同時に、従来の家具作家のように、死ぬまで貧乏なのは嫌だった。家具作家を辞め、会社組織の中の一人として活路を見出すしかない。すなわち、作る人間と売る人間を役割分担していけば、再びチャレンジできるだろう。そう冷静に判断した。その頃、



4人の若者が、日夜技術の向上に励む。ワクワクできる目標さえあれば、どんな辛いことでも楽しくなる。松岡はそう伝えている。

亀井は新築やリフォーム住宅用の造作家具会社に就職していた。騒ぎから一年半後、松岡に何度も口説かれた末、亀井も決断する。今度の二人は、造作家具でも何でも仕事を受けた。十月で一千万貯め、法人化に漕ぎ着ける。松岡が作り、亀井が売る、その分担当が軌道に乗ったのだ。亀井は、バイヤーが参考例にするほどの適任だった。途中で取引先の倒産やリーマンショックの煽りも受けたが、今度は倒れなかった。何とか乗り越えられたのは、松岡が一人ではなかったからだ。

これから社会で闘う若者たちへ

ここまでの松岡の成功譚を、人々はどう見るのだろうか。まったくの他人事で、自分はそのままでできないと思うのか。それは嫉妬感情の裏返しで、「したいことを見つけた松岡が羨ましい」。本当はそう感じているのではない。松岡の原点には、家具でもスケボーでも好きだと思ったものを極めたい、それがあった。だが、彼がその情熱だけしか持っていない。なかつたのなら、社会に潰され継続はできなかっただろう。白眉だったのは、「好きをいかに続けていくか」を考え、自分の場所を一から立ち上げたことだった。芸術家的な側面だけではない、いわば実業家的な側面が共存していた。

松岡のこの道のりを、特に若い人

たちに伝えたいと思う。なにも彼に見習い、勝ち組になるべきだ、と競争を助長しているのではない。まだ何者でもないあなたがやりたいことを見つけ、今後社会の中で表現していきたいと思うかもしれない。松岡には幸か不幸か父親の教育があった。自分がやりたいことを常に問い、未熟でもすべて自分で決断した。その過程があったからこそ、人生の分岐点で自分のセンスに絶対の信頼と自信を持てたのだ。受け身では不利益しか被らないのが今の世。上から押しつけられることに領いているだけでは、自分を押し通せない。だからあなたには、当たり前のことを当たり前として受け入れるのではなく、それに疑問を投げかけ、あらゆる選択肢から最良の道を選び出すという感覚を養ってほしい。来たるべき時のためとして、自分の意識を常に研いでおくことが必要なのだ。

松岡は、父親のことを必要以上に話したがらなかった。そこに、彼が挑戦し続けることの原点があるようにも思える。まだ発展途上、どんな未来が掴めるかも分からない。しかし、父親の教えと亀井という最大の伴走者がいる彼は、ちよつとやそつとじゃ崩れることはない。

松岡茂樹 まちおかしげき
一九七七年、東京都生まれ。木製家具会社を経て株式会社KOM設立。無垢木材のオーダー家具が特徴。東京の森を活かすプロジェクトやモーターショーでの発表等、活動は多岐に渡る。今春、西荻窪に路面店をオープンさせた。

●ともに学ぶ

図工・美術の先生と子どもが、ともに作りだす学びの日々。

●背景を塗らせたけれど……

私が教員になって間もない頃のことです。大好きな図画工作の授業に関しては、一生懸命に教材研究を重ねて実践しているつもりでした。

当時二年生を担当しており、掲示板にクラスの児童が描いた「お話の絵」を掲示していました。ある時、その中の一枚をご覧になった先生が「この絵、素敵ですね。登場人物のこの表情に、子どものおもいが感じられます。でも、この背景の色は先生に着色するように言われて、仕方なく塗ったのですね」と仰いました。ショックでした。なぜなら、その通りだったからです。こともあらうに、私は絵が出来た児童に「じゃあ背景だね。どんな色で仕上げたい？ここに色を選んで、滲みかタンポで仕上げようね」と、作っておいた何色かの絵の具を並べて指示していました。その日以来、私はそのような指導をしていたことを深く反省し、どうすべきだったのか自問自答の日々を送っています。今から思えば、描かれているものと背景が相当ミスマッチで不自然だったのでしょうか。

背景に着色するかどうか、どんな描

画材で、どんな色で……。それは、子どもが自分のイメージしたお話の世界を基に、自分で決める事なのですね。
京都府京都市立京極小学校 久米昌代

●人間について学ぶ

「美術の授業で何を学んだのか？」という問いかけに、これまで関わってきた生徒たちは卒業間際にこんなことを言いました。「美術で、人間ってどんなものかということを学んだ気がする」と。私としてはうれしい評価です。勿論、作品を制作する時間が多いのですが、授業の中で個人への言葉かけを「作品」の上手い下手ではなく、生徒の人柄や周囲への働きかけを交えながら、その生徒自身の思いが表に出てきているか否かという観点で行うようにしてきました。制作途中の教師の言葉や表情や態度による評価が生徒の心の内側を揺さぶります。表現が多少稚拙であっても、不器用なものであっても、完成していないけれども、その生徒の人となりを感じられる「作品」であれば、最上級の評価や賞賛を与えてきました。

教師の価値観を教え込むことになら

ないように気を遣いながら、生徒たちが自身の疑問に対して的確な判断のできる人間に育つように取り組んでいます。短い時間の中で、昔のように人間の面白さに気付く生徒の出現が残念ながら少なくなってきた気がします。素敵な教科なのに、不要論があるのは残念。平成二十六年年度の「全造連・関プロ造形研究大会山梨大会」が阻止の一助になるように、いろいろ企み事を準備中です。
山梨県甲府市立城南中学校 窪田真敏

●子どもの内なるところを

校内暴力が吹き荒れていた頃。毎日のようにガラスが割られ、対教師暴力反抗は日常茶飯事。そんな状況下授業を成立させるべく、毎日、精魂を使い果たしていました。あの緊張感を思い出すと、今でも体が固くなります。

私は「美術の授業が成立する」と言う時、いつも「子どもたちの心と体は意欲的に表現に向かっているか」と問うことにしています。それは、手立てやしかけを前もって、こと細かく考えることでもありました。

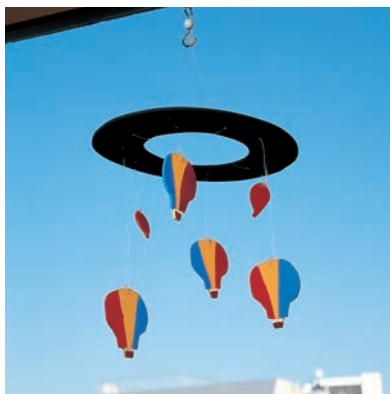
そんな頃の、中学三年生の自画像制

作です。当初、私は絵や彫刻による表現を試みようとしたが、どうもしつくりいかなかったです。間接的すぎるのです。もっと直接的に子どもたちの心と体を表現に向かわせたい、そう考えた時、ふとアクションのことが浮かびました。そして、「私」「僕」の文字と直接向き合わせることにしました。すると、「瞬子どもたちはとまどいました。堰を切ったように皆が一斉に表現に向かったのです。しかも、ものすこいスピード感を持って。ベニヤ板に文字を転写し、切り抜いてバーナーで焦がしたり、何枚も文字を切り抜き色を塗ってから、いろいろな角度に重ねて立体にしたり……。千差万別、思いの込められた自画像が完成しました。

それからです、私の授業が大きく変わったのは。あくまでも表現者は子ども自身であり、その内なるところから作品は生まれてきます。

ならば、美術の授業は、子どもの内なるところをさわらなければならぬと確信したのです。

兵庫県神戸市立兵庫中学校 校長 西崎渉



小学校5年

[板材・えのぐ・テグス/高さ35cm] [図画工作5・6上] P.13 掲載



中学校1年

[流木・貝・カラーセロハン・テグス/高さ38cm] [美術1] P.15 掲載

児童・生徒作品解説

風の動き、光の方向など、目では捉えきれない世界への誘いを可能にするモバイル。自然を体感し、その声に耳を傾ける姿勢から生み出される造形でもあります。

青空に浮かぶ気球をイメージした小学生の作品。鮮やかな原色で彩られた大小の気球がバランスよく配置され、大らかな動きで空へ飛び立ちます。一枚の板材からむだなく切り分けた形には美しいリズムが宿ります。気球の側面は滑らか且つ丁寧に色が施されました。このような細部への心配りが、ゆらめく形の変化に二層魅力を与えています。

沖縄の海風をイメージした中学生の作品。風が吹くとセロハンが揺れて光を反射します。同時に涼やかな音色も聞かえそうです。長い時間をかけて風化した流木。自然の営みと記憶を刻み込んだ流木に、海を想起させる貝、風や光を照らし出すセロハン。厳選された素材の形や色が爽やかに響き合っています。

これらのモバイルに対峙するとき、私たちのからだは心地よく浮遊し、風にも光にもなれる、そんな自在性を与えてもらえる気がします。

文 群馬大学 准教授 郡司明子

形 forme No.300-2013

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成25年(2013年)10月15日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

本書の無断転載・複製を禁じます。

Cover photo: Kazuhiro Isoda (YUKAI)
Design: Kazuhisa Yamamoto (Donny Grafiks)

CD33206

発行所

日本文教出版 株式会社
<http://www.nichibun-g.co.jp/>

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690